

號 五 第 卷 貳 第

佛とは覺者

佛とは梵語にて譯すれば覺者云ふ。眞實にすべての眞理を識らかに自覺したる人と云ふことである。眞實自己を自覺すれば、自己の本源を知り得る。自己云ふものは本がなくてはならぬ。本源の自性を覺りたる者を覺者と名く。之を宗教的に表はすれば、眞の自己の本の大ミオヤと云ふことになる。本の大ミオヤを先づ第一に能く信知しなくては宗教心は成立たぬ。私共如來の大ミオヤの恩寵に浴しなくては有難い信仰心ができぬ。然らば何にしてこの世に最も尊き大ミオヤの在りますことが初めて知り得られたのでありしやとすればこの世界には釋迦尊が御出世なされて教へて下さられたのでミオヤを信知することができたのである。釋尊も本は實には大ミオヤより身を分けて此の上に出でましたのである。然れども此肉體を受けるにつけては父母がなくてならぬ。故に父を淨飯王と云ひ母を摩耶夫人と名け、王の家に生れて幼名を悉多太子と申し上げた。國王の位を得て無上の光榮ある御身の上なれども本々一切衆生を救度せんが爲の御出世なれば王位を避けて山に入つて御修行なされた。而して勤苦六年の御修業の結果、終に向走八日の間に無上正覺を得たまつたのである。願はくは世の同胞衆よ、絶を教祖に取り、御教へを信じて念佛三昧を行じ、自己の本源たる大ミオヤを覺知したまはんことを。



辨榮上人御遺稿

歸命と念佛

歸命と念佛と云ふことに就て宗教の眞理を説き示さん。南無の梵語を歸命と譯す。歸命の解釋に二義あり。歸本と歸依の中に歸依の義に就て歸命の義を明さん。歸依とは、衆生は心が無智無力なれば絶対大なる大威神者大慈愛者に歸依(トツク)の義である。トとは世の女子が夫にトツクと云ふ義、詩經に「桃の天々たる此葉奈々此女」に歸り其家實に宜しく、一體女子は獨り家庭を成し子孫を成すことばできない。必ず男子

にトツクがねばならぬ。夫に歸りて初めて家庭を造り子女を擧げて家室をグハイ能く爲すものである。故に男子に嫁すことを(トツク)と云ふ。即ち(トツク)と云ふ義である。然して女子が男子に歸るに就ては良の配偶者を選ばねばならぬ。若しも生涯の運命を一任する夫にして或は放蕩者或は無稽漢の如くならば又奸邪悪性漢に歸るべきはいかん悲運の酸苦をなめなければならぬ。世には奸邪色魔の毒手にかゝりて悪魔に身を委ねねば身を醜業婦に陥らばまた破鏡の悲運を招ぐに至る如きは概して女子の智恵なく一時の迷の爲に眞に生涯を誤るに即ち歸き所を誤りたるの致す處である。昇は一生六十一年の損失なり。まして况や永遠の生命を一任する心靈の歸べき宗教上の歸命信託すべき信仰の對象たる本尊(神)を撰定するに於て最も大事なり。

—(2)—

神教的の禱、天台等の如きは自己は佛なれば他佛を本尊とするの要はない。我國の如きは宗教の教不完全なるが故に迷信多く邪教神淫祠甚だ多し。又種々雑多の神を拜し何れの神が最高等なるまた眞理なるかを覺せず實に愚人の淺聞敷現世祈りの信仰、いかなる淫祠邪教でも選ばざるに至る。それらの邪神魔鬼は衆生の心靈を完全に回滿に成就せしむべきの神にあらず。然るに淺劣なる愚夫野人の信心の歸する處恰も愚なる女が色魔の爲に魅せられて生涯を誤るよりも甚し。是宗教が信仰の對象たる歸すべき本尊を選ばなくてはならぬ所以である。然るに大乘佛敎に教ゆる所の信仰の本尊は最も勝れ最も完全なるもので、宇宙の眞理はもと一なれば眞理の主なる神格は唯一ならざるべからず、この唯一の本尊を教祖は教へ玉へり。佛敎に十方三世の無量の諸佛を説き玉へども、其中心本尊は無量壽如來なり。經に「無量壽佛の威神光明最尊第一にして諸佛の光明及ぶこと能はざるどころなり」としてまた彌陀は諸佛統攝の獨尊たるのみにあらず、無量の

に於て二人同身の理である。心靈に於てもまた既に歸命の神格は唯一でなくてはならぬ。之を歸依佛といふ佛に歸りて爾後は餘の外道の神に歸せぬなり。是を儀式的にせば、正しく心靈の締結、即ち結婚式を歸依式と云ふ。縱令儀式を以て歸依の意を表せざるも正しく自己の信仰が唯一の神尊に歸して云何なる事情の下にも佛依信心の心意が動かざるに至りまた他の宗教の爲に歸命の神格を變更せざるに至れば正しく歸命の實を成したるなり。然る時は即ち心靈的に結婚したるなり。爾後は心の妻に如來は常に在ります。されば死來の無頼獨身の夫とは同じからず。神聖なる如來は心の奥宮に光明輝赫と輝けり。大慈愛の彌陀は慈悲の面を注ぎて永へに向ひ玉へり。赫々たる威神の前には自ら正當ならざるを得ぬ。愛々たる慈愛の温容を想へば心の穢もまたは怒も和らぎて平和と歡喜とに満されん。究く如來が常に心の妻にかゝる時は、自己の精神生活も理想も高尚になり向上の光明をも得るに至らむ。此れ聖潔なる如來との結婚、聖潔が磨らし来る持

行願を以て一切衆生の爲に衆生の靈性を成就せしむべき誓願あり聖善導が、この誓願は衆生の爲なりと。故に衆生信仰の歸命信託すべき尊を求めむと欲せば即ち阿彌陀佛に歸せよ。即ち彌陀に歸りて彌陀のみ獨り無上の愛を以て衆生を攝受して衆生を我有として、我(衆生)を成就せしめ玉へ。

念佛

念佛の念てふ文字は、人二心即ち二人相共したる心なり。念は念頭にかゝる何か自分の外に、或物が常に心にかゝること。例へば金に執心する人には常に念頭に金と云ふものが執して離れぬ。また一人の子に愛執する人の念頭には常に子を念ふてをる。然る時は自分の心の中に子と二人を爲してをる。人物若しくは財物とか何物か心に懸る物無き時は念頭になきなり。念頭に阿彌陀佛が在りて離れぬは爲りしは即ち念佛

—(4)—

—(3)—

おもひの心である。従來の明記して忘れざるを念と爲すと云ふは唯記憶の心理状態の如くにして、感情的、執意的になつて居らぬ。故に佛を念の心理としては未だ完からず。宗教心は只佛を記憶に存するのみならず未だ活た信仰と云ふに足らず、彌陀の絶対人格に對して愛慕慈念して感情的に内心に活躍して暖温なる活氣に血湧き、有難さに涙こぼれずして超て彌陀を愛樂して止まず悲歎に沈む折柄も、彌陀を念する時は心の奥底より衝動する有難さに心氣一轉憤怒に耐えざる場合にも稱名によりて念ひ出づる慈悲の面影に接する時は却て己が到らざるを謝するに至る。念佛とは常に如來を憶念して離れざるの謂、一度絶対の人格者に結びて合ふ心に離れず憶念し愛慕して捨てること能はざるは念佛なり。二人の結びたる心が即ち念である。能念の心に所念の彌陀と一體心に結合したる心が念なり。

○念佛に安心と起行

表現なり。この靈的表現の彌陀より外に自己の絶対的歸命信愛するものはなし。斯の如くに全身生命を獻げて上へ奉る程自己の希望なし。彌陀に歸きて餘念なき態が即ち是れ正しく自己の安心決定なり。我全生命を獻けて彌陀に歸する所に我は既に是れ如來の所有なり。我既に如來の所有となる時はまた如來は即ち是我有なり。眞實に彌陀を信愛して献けたる我生命なり。彌陀を離れて我生命はなきものなり。故に云何なる事情の下にも自餘の神に信愛の念を移轉することなきなり。恰も眞婦が夫に對する情懷が、命にかけて夫に献げたるよりは望き彌陀に對する信愛の情懷なり。或る光明會員の内に表傍せらるゝ如き善女人あり年久しへ彌陀に歸し念佛をつとむ。予は曾てこの婦人は良も博識の全き信仰家なりと想ひたりき。偶或人の説を聞くに某善女人は近頃或種の神を尊崇し信仰しをれり。予は之を聞いて彼の善女人にして究る迷信に惑はざるゝ如きは有ることなからむと或日某女人に對問し餘方に問ふ或人の説によれば貴婦は近頃或る某神

安心とは安置心即ち心の安置をすること。自己の宗教の主とする處の己が歸く處の神尊は唯一無二獨りの神に歸きて二つとならばおかぬこと。例へば、眞女兩夫に見えずてよく獨の神尊の外に併べて歸くべき神なきなり。同一の神に心を安置していかなる事情の下にも其歸命の心を變更せざるなり。命にかけて歸するなり。いかゞなれば宗教心の歸する處の主尊は宇宙唯一無二の眞理の源に在りて、いかなるものも變へること能はざる尊靈に在りて、責任者なればなり。唯一の尊靈なる如來が彌陀の慈愛を以て我を愛したまふことを信する時は我も彌陀の愛を以て如來を愛念せざるを得ぬ。如來は絶対無限大威徳と大自在と大慈悲とより我を愛したまふ慈悲からして、いと麗はしき慈悲の面を表はして我を愛し玉ふことを示したまふ得ぬ。眞實に宇宙間唯一無二の靈的人格現に對しては我らは愛念せざるを得ぬ。宇宙全體の大靈より表はしたる人格表現なれば其所現の身の大小に拘らず絶対的

を信すると聞けり、實に然るや、予は貴婦の如き堅固なる安心を立て唯一の彌陀を信奉する善女人にして斯くの如きの信仰に入ることは恐らくは然らざらんと、而し乍らまた何かの事情の爲に止を得ざる故ありて他の神を信するに至りしものなるか頭はくは實を以て貴婦の信仰の状態を聞かじめ玉へよと。某女人答へて曰く「妾は彌陀に歸して他の神に仕へずまた他の教會にも出席せしことなきなり」と。尙更に問ふて曰く「然し貴婦の安心願くは一大事の事なれば、如實に貴婦の安心を告白し玉へよ、予は實に貴婦に彌陀の同情を以て或は萬止を得ざる爲に也の神を信したるなれば貴の如くに答へ玉へよ。正直の頭に神尊の貴婦の正直なる處に神は感應し玉へければなり」と。聞ければ女曰く「若し信仰の安心が未だ曾て決定せざりし時に他の神を信じたりしに、後彌陀に歸し奉ることを得たり。然るに若し婚來の神に對する信仰を廢する時は、其神の怒りに觸れて生命を奪はるゝと云ふ場合は云何に候や、縱令生命を奪はるゝとも其神を信してはならぬものに

—(6)—

候や、生命には替へられぬ故に其神を信じて彌陀はゆるし玉ふものにて候や」と。其女の問はれしにより予は答へて「其は彌陀に一任したる歸命の信仰が貴女に安心決定したる上は既に彌陀に歸したる身なれば縱令舊來の信仰を廢したる爲に其神の怒りに觸れて生命を奪はるゝとも、是れ彌陀に任したる上はいかに決心すべきや貴女自己の情懷に存する處を以て決すべきものにて他人に問ふて後に決すべきものではない。其安心の決定は貴女の一心の決定である。若し例を以て云はば貴女が夫家に歸きたる後自己の運命は己に夫に任せ而して夫は最も自分の理想の良人家柄と云ひすべてに其渡りて自己の希望を満足せしむるに足る家に嫁したることを實に己は幸運なりと内心常に悦びたりしに、自己の夫は此良人の外に在る無しと決心したりしに、他にある男子が貴女にせまると、我妻に爲て玉へよ、若し我意を容れざりせば我は貴女を殺害せんと脅迫せらるゝ時は貴女其時に當つて云何に答ふるや。縱令生命を奪はるゝとも其仇し刃に隨はざるべ

の人格が彌陀に選取せらるゝや、捨らるゝや、貴女の彌陀に對する眞實の云何に存すにあらすや。また貴女が信仰の眞實の眞と似ては貴女の情懷の云何によつて決定すべきにあらすや。是彌陀に對する安心てふ心の安置おく處を誰乎と決定すべきなり。貴女自から決せよ、是貴女が彌陀に對する眞實なるか不眞實の安心なるか二つに分るゝ分岐點である。斯くの如くに一度彌陀に結婚したる兩降の情懷と意志決定とはいかなる事情の下にも動搖せざるを安心決定したる念佛、即ち如來と二人一つになりし心なり。

○起行の念佛

起行の念佛とは、前の安心を成立せしめんが爲に彌陀の恩寵を獲得し眞の信仰の生活、靈的生活に入らんとし、また靈的生命として活動行爲するの實行方面なり眞實に彌陀と結合して我は彌陀の子、彌陀は全く我父また我夫として其大なる恩寵にまた光明に依つて自己の靈的生命が成長せらるゝ増上線となる。光明が即ち

きや、將た生命には替へられぬ故に其男性にまた一身を歸任すべきに決定すべきや。貴女は此を自ら決定すること能はざる故に他の同意を得て後何れかに決すべきや云何。若し自己の情懷に決定すること能はず、他人の同意の下に初めて決心すべき如くならば、斯の如き不眞の婦女、其情懷の美として取るべき無きものなり。斯の如き眞實なきものは其に先だちて貴女の夫は貴女に離婚を與ふらん。肉體の結婚に已に然り。況や心靈上の成神聖なる歸命の婚に於ておや。自ら反省したまへ。無智無力罪惡深重の夫、墮獄必定の身が過難くして彌陀の本願に値ひ生命を獻げて大悲の救済を仰ぐべき身、一度彌陀の容るゝ處と爲り身の幸を悦びたりしにあらすや。縱令生命を奪はるとも、決して不動の信念を立て全生命を歸献したる上の情懷に於て始めて眞實に隨はしき信が加はり、智恵もなく徳もなく何一つ選取すべき無き身が彌陀の容るゝ處と成りしを意へば生命何の惜きことあらん。貴女が信仰の眞實いか、情懷は貴女自身の情懷にあらすや、貴女

—(8)—

—(7)—

佛を念じて佛の増上縁を被らんに初めは未だ信仰の如來の實在を認信するの意識もなく、胎内の子が(血)に養はるゝ如く、次に嬰兒の乳汁を呑む如くまた信心の中に靈的の妙味あるを覺えず、家庭に於て父母に誘はれる朝夕の禮拜式をつとめまた讃歌を歎ひ稱名を稱ふ如くまた如來の眞理を教典によつて知り得る如く、念誦三昧及び禮拜讃歌等は信仰心を養ふ資糧なり。中に就て念誦三昧を正中の妙行とす。

若し念誦三昧を以て靈的生命を長養するの妙行なりとするにあらざれば(我等が靈性の開發は得て望むべからず)念誦は太陽に向ふ如くに如來てふ心靈の太陽に向て念する時は信心の心も益々向上す。念誦三昧を念すれば自己の心も漸くに強固に同化する。要する處は彌陀は萬德圓滿にして缺ることなき靈體にして、無量光明の發源となれば、念する衆生の心も程度に隨つて不思議の力を得て信心漸く増進す。始めは信心喚起の増上縁と爲て念佛するに隨つて心靈喚起する起行

の沈んだ空気を願はして、御上人の御靈魂を慕ひ奉る様な、鉦の音に讀經がすんでから、莊嚴に行列をして境内を一周致しました。雙盤講、音樂講等の哀調を帯べる法樂の裡に、學園の生徒と、光明會員とを先にして、御本葬に參會せられた人々が皆言ひ知れぬ涙ぐましい心を抱き乍ら、お供致しました。それから御上人様の御柩の周圍に着座致した時には、もう、うす寒い雲が、陽の光りと戦ひ乍ら、颯々と天を驅けて居ました。灯もお上人の御葬式を悼む様な風が、香の燐りと蠟の焰とを、悲しさにゆすりました。

と爲り、次に念誦三昧の如來の光明は、信心開發の増上縁となる。次に念誦三昧は心靈的人格の果を結ぶに如來の光明が上増縁と爲る。念佛の起行として信仰の過程三階に渡りて(如來の光明は常にその増上縁となる)。

辨榮上人の御本葬式

光明學園生徒 植村榮輔

藍麩の底の様な美しい、あさみぢりの空には所々に乳白色の春待ち顔な雲が滲むで居りました。軟かな陽ざしは、沈み切つた當麻山の森の空気に輝いて、その光りの恩澤に身を撫でられた私達は、もう感傷的な心になつて、その胸奥には、御上人御遷化當時の悲しさが蘇返つて來るのを覺えました。言ひ難い靈感が泌々と自分達の、さびれた心にもこみ上げて來るのを感じました。

嚴かに式は始まりました。陽の光りが稍傾きかけて三時過ぎた時、なまぬるい風も淋しみを齎らして、心の中まで仄かに小さい戰慄を興へました。本堂の中間の間に、もうすつかり沈黙のうす間を擁してゐる

ない者は誰ひとりありませんでした。御上人を偲びまつる至情は感きはまつて、聲涙と共に下り、頭を上ぐる者もありませんでした。そして最後に、「光明の教たれ、はすの上、照り輝ける御姿を。」見よ蓮き國、はすの上、照り輝ける御姿を。」と二回くり返して上人禮讃の歌を唱ひました。三時間餘に亘る莊嚴な式が終へた時、もう陽は、両の山の涙の様な雲に春いてゐました。千年の當麻の森に交す枝々の間には、もうすつかり沈黙のうす間を擁してゐました。

光明會員、光明學園生徒の「聖きみくに」を唱ふ歌と共に、御上人様の御遺骨は、埋葬せられました。私達は何かか心の體でも、削り取られる様な気がして、其儘、いつ迄も、立ちつくしました。式が終つたのは、六時頃でした。折からの晩鐘の響は、沈々として、深く切に御上人の御心を追慕し奉るかの様々に、夕陽の森に、滲み込むで行くのでした。

京都の假埋葬式に参加して

谷安三

廣い大庭には二百名に近い御別時の結果が音もなく控えて居ります。中央に安置した御靈骨の前に香の煙が静に、堂の空気に調和してゆらめいて居ります。祝下の莊重な聲が一座の沈黙を驚かさぬ程度に響いて静けさを一掃り掃ること多くの聲が後に響きました。しばらくは讀經の聲が波を打つて耳朶に響きます。高く低く微妙な音が堂に流れて一座の氣はようやく緊張を加へました。

を知らぬ私には何だかもう一つシツクリせぬ所がありました。上人様と禮拜儀とを離す事のできないものと思つてゐる私は、どうもこれが上人様の御同向のやうに思はれないのでありました。上人常在の念に住するもの、當然の時結である、回向するのではなくて回向

に驚きました。驚きの餘り茫然と致しました。あり得べからざる事實が今現に眼前に行はれつゝあるのでありました。太陽が西から出ても、加茂川の水が逆さの流れでも、上人様の御靈骨が赤い土の中へ用のない骸のやうに埋められて行くより以上には、不思議であります。そう私はその時思ひました。私は言ひ難い氣分を懐いてあだかも救ひを求むる小羊のやうにあたりを見廻しました。そして、お、其處には何がありません。耐えに耐えてゐた涙の悲しみにうろむ幾多の眼が世ももう私の力の外でありました。

御斷りして置きますが私は唯正直に當時の心持ちをそのまゝ言ふに過ぎないのであります。上人の御骨を土に埋めやうと川へ流そうと上人常在の事實に變りはないではないか。上人も同じ人身を受け給ふた以上普通の人間と同じやうにこそ葬るべきである。そして上人も必ずやそれを御印みになるであらう。上人は形式を廢されたから、上人は自ら他と異なる事をお示しにならなかつたから。かう云ふ人があるかも知れません。その人に私は言ひたい、たつた一言「私は理屈を言つてゐるのではない」と。誰れが上人の御遺骨を土に埋め

して戴くのであると思つてゐる私には何處か腑に落ちぬ處がありました。けれどもそんな私の心には關係なく、式は沈重に漸次に進んで最後に信者一同の敬虔な念佛を以て終りました。それより一同は阿彌陀堂へ移り又習く御念佛直ちに御靈骨の御供をして元祖様の御廟に詣で、それから私は勢至堂の裏手に常る墓地と墓地の間を何處ともなく登つて行きました。その時私は自分て殆ど何の爲めに登つて行くのか解りませんでした。唯音の後に従つて無意識に登つて行つたのであります。あゝそして私は終に何物に行き着いたのであります。南無阿彌陀佛。それは思ひがけなくも上人様の御墓であつたのであります。

上人様の御葬私はそれでもやつぱりボンヤリして居りました。假埋葬と云ふのだから何か埋める真似でもするのだらうと思つておりました。澤山の入達が一所を取り囲んでお念佛を稱えておりました。見てゐると人足が土を掘りはじめました。何だか少し様子が違ふやうであります。舍利殿文が始まりました。その時です私の胸はものに怖えたやうにさわぎました。お、見よ上人様の御靈骨は土に埋められるではないか。私は本

たから上人の御本體も土に埋められたと思ひませう。けれどもそれは私の心が納まらなないのであります。これが師を遇する道の心がなまらぬのであります。これを化して永遠の生命を與へ下された恩人遇する道でありませうか。籠を古今に垂れ、水遠に輝く光明を躰し埋もれた眞理を願はし、全人類への全き福音の堅き礎をシツカとすえ直し給ふた佛陀那はかく葬らるべきなのでありませうか。

お、見よ、人々はその打ち震ふ手に赤き土を盛るではないか。お、見よ、アカ水波を汲む人々の涙に溢る、赤き眼を。未法の世、衆は五濁の濁流に溺るとも眞理の道に二つはよるべきに。あゝ願ひれば上人滅度を示し給ひてより僅に十旬、その温き懐に喜びの涙を、ぎしは昨日の如く覺ゆるに。針らざりき今その派化して墓場の土を濕はさんと。止めんとして止むる能はざる悲痛の涙は我が頬に溢れ、我が心は堅く遺骨を懐いて世の無常になく。あゝさし人もあるに、我身の淺ましき。四肢を失ひては球を懐きし人もあるに、我は師の遺骨を負ひて眞理の爲めに叫ぶ事能はざるか。あゝ我力足らずして、空しく衆人に和して師恩を地下に葬り徒らに人目を避けて西石の涙を注ぐ。我涙の海を以て遺骨を漂はすとも上人豈に喜び給はんや。如かす今日

より以後心を回して精進に向はしめ、遺法を奉持して不退に勤修し、一心専念心光を獲得し、應分の奉公、以て恩酬の尊徳をなぐさめ、廣恩の萬一を報せんば、誓つて此の深き成就し、今日の不幸を謝せんばあるべからずと深き決意のもとに頭を擧ぐれば人既に散じて二三子のみ。墓前の燒香正に斷腸の思ひ、佛陀禪那と記す墓標を前にしては涙又更に新なるを覺ゆ。唯僧かに自ら慰めて云ふ「昨日時きし種は今日に實らすとも、何時か完き收獲の秋を見ん」

墓前を退いてつく／＼と思ひました。我の今日あるはそも何人の賜であらう。浮游の生を受けて三界に墜縛せられ、六道に流轉して出離の期を得なかつたのは昨日の我の姿ではないか。然るに一朝大慈の光明に遇ひ、無始の痴闇を拂つて如來招喚の御聲に聴かしめたものは、そも何人の力であらう。

私は此の時、夜の座談會に話された熊野上人の言葉と思ひ出しました。「信仰とは血の涙の底より咲き出づる心の花である」と。お、信仰よ、汝を見出すべく人は如何なる犠牲を拂ふ事であらう。而もその拂ふべからざる犠牲を拂つて得し信仰の花も、温き恩寵の日つくだであります。上人様の火元より得た私は苦勞知らずであります。けれどもその火元の火は如何にして得られたのでありませう。そして又その火元から如何なる経路を経て私共の心の薪にそれは燃えついたのでありませう。

かく考へ來つた時私の心には大谷、佐々木二人の感話と思ひ出されました。その昔、上人様が初めて九州に下られた時、大谷上人が随行當初の数年、否その以前の幾十年、教へんとすれど聴く人もなき無收穫の荒野の旅路を上人様は如何なる思で御過し下さつたこととせう。その長き御辛抱の結果は終に今日あることを得て、私如きもの迄が救ひの御手を懐かれることが出来ました。

けれども上人様の御苦勞は何時になつても終る時がありませんでした。昨年當麻の閉山期を濟ませ、信州を経て越後への御途次、北國の冬の夜を長岡のステーションで御過しになつた事を、當時御隨行の佐々木上人がお話しになりました。それは冷たい風の吹く夜であつたにせうです。私は當時を思ひ出します。京都を夜行で御立ちになつて當麻では二日間殆ど二時間宛程しか御睡眠になりませんでした。その御疲勞を御休めにな

の光を蒙らざれば價値ある果は結ばないのである。あの起し難き信仰を起さしめ、遇ひ難き恩寵の光に遇はしめたものは、そも誰の力であらう。

人は本然に向上（即ち完全を求むる）の欲求を持つて居ります。その本然の欲求は不完全なる現實の矛盾に遇ふて苦しみますにはほないのであります。この廣い世界に一人として苦しみを持つてゐない人がありませうか。解脱を求めないものがありませうか。それは單に程度の差であつて、皆同じ苦しみに悶え、同じ欲求に燃えてゐるのであります。然るにその多くのものは尙三界の繋縛の中にあつて苦悶を繰り返してゐるに我等のみ地上の因果を超脱して眞實の慈父の御許に歸する所以はそも何處より別れたのでありませう。殊に私如き浮世の苦しみをも深く味はず、人生の煩悶にも徹底せず、徒らに浮世を夢遊すべき身が、かくも強き救ひの御手に納められたのは何故でありませう。言はずもがな唯一つ、如來恩寵の體現者たる故上人に御遇ひ申すことが出来たわけの故であります。

火を得るには二つの道があります。自らを磨擦するのと、火元より導くのと。そして自ら得ることの困難なるに對して、火元より之を導けば濕つた薪にも火は燃ゆる所か又直ちに汽車で上諏訪へ御向ひになりました。上諏訪には澤山の信者が待ちこがれて居ります。それになつた一日でも、ごうしてゆつくり御休息の暇などがありません。その疲勞し切つた御身體で、夜具もなく、三方を開け放つた寒風の吹き入る待合室で一夜をマソリともせず御明しになつた時、あゝその時上人様は何と仰せられましたか。私は思ひ出して涙かこばれます。「ナニこれしきのこと……」と。

あゝ此の御言葉！六十を過ぎては夜汽車さへも御大儀に御思召すべきに、連日の御疲勞の後に寒夜を烈風の中に過して「これしきのこと」と仰せ下さる大慈悲心が疑つて度生の大願となり、恩寵の雨に化して我等が佛性に降りそそぎ、眠れる心霊を呼び覺まして我等が荒れたる心地にも美しき信仰の花開く事を得しめたのであります。

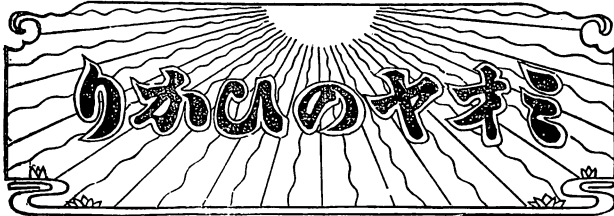
然もその奇特の靈力を得たまふ爲めに上人様は如何程の御修業をせられましたか。傳え聞く十七歳の御出家より六十年の今日迄、御自行の激烈なる、睡眠を節約し費勞を省き、寸暇を惜しんでの御修業は唯専に我等を慈父の御許に御導き下さらんが爲めであつたのであります。誠に以れば我等一聲の念佛はこれ上人の

膏汗と血の涙との結晶であります。上人の心に實りし念佛の聖種子が、更にその膏汗と血涙とに依つて我等の心に移植せられたのでありませう。この貴き賜を得たる我等は何を以てこれに報ゆきべでありませう。キリストは言ひました。「汝等價なくして受けたれば價なくしてこれを與へよ」と。けれども私は更らに言ひませう。「我等血の涙を以つてこれを受ければ、血の涙を以てこれを與へよ」と。實に我々はこれを入々に分つかにこそ血の涙を流すべきであります。キリストの内體を十字架につけたものは、パリサイの徒でありました。けれども眞にキリストに十字架を負はせたものは異教徒にはあらでキリストの弟子であります。キリストに依つて今現は救はれつゝある眞のキリストの信者であります。何故ならばキリストは唯彼等への愛の故に十字架を負ふたからであります。人はその師を十字架に釘づけなければ信することのできないやうな悲しい性を持つてゐるのであります。あゝそしてそのやうに上人様の心に十字架を負はせたものは誰でもない此の私自身であつたのであります。かく考へ來つて私の心は深い悲しみと言ひやうのな感謝の念に満たされました。かのアッシジの聖フラ

ンシスは、自らの衣に十字架を荷き、素足で街を泣いて歩いたと云ふことであります。人その故を問へば「私はキリストの憐みのために泣きます」と。あゝ私は上人様の憐みのために泣きます。唯一つの真理、如來の福音のために終生を苦しみ悩んで下された……。然るに私の心は尙更に大きな或ものを見て、更らに更らに深い悲しみと感謝とを味つたのであります。上人様の悲しみは今尚つきない。私は思ひました「上人様の御残し下さつた無量の遺産のうち、その幾分が眞に私のものになつてゐるのであらう。與へた上にも與へんとして下さる上人様に對して一體私は何を以て来たか。」

私の涙は止りました。私は一言を出す資格さへもないのであります。かく迄も偉大なる慈悲の前に唯唯沈黙の從順のみが應はしいと存じます。南無阿彌陀佛。無作法な私の告白に對して御親切な御教言を祈ります。

大正十年三月廿五日印刷
編輯兼發行所 岩品誠信
東京市橋本八丁一丁目十五番地
印刷人 秋場熊太郎
千葉縣葛飾郡松戸町二丁目
發行所 光明會松戸教會所
振替東京四九三六番



號六第 卷貳第

喚びませる御聲の、また聞えぬは
迷の眠りふかければなり
大ミオヤの情こもれるよふ得に
深き眠りも今はさめける
子を思ふ親のなまけの深くして
招きの聲におごろふかれける
大ミオヤは子を擁めて自らさ
同じさごりに入らしめんため
親は手をかばかりまで思ひしに
子はなごて親を慕はさりけむ
大ミオヤのみ胸やすらうことなけむ
迷の子らのあらむ限りは
天地のよろづのそなへたまはる
子を育まんむねとほしる
かくまでに御恵み深き大ミオヤに
子はいかにして報いまつらむ
眠りさめ聞夜は明けて大ミオヤの
常世の春はのとけかりけり

上人御遺稿
蠟燭の使命

凡そ世に有ゆる物夫々の天分あり。各天の使命を以て世に存す。蠟燭の使命は人の爲に聞き處を照し人の燈明として其の使命を果す。如何に、さい蠟燭にても火を點せざれば、其の職分を果すことは能きぬ。宗教的人類として人を觀する時は、人の精神の奥なる靈性は、大ミオヤの使命なる靈的蠟燭である。故に人の心盤にはミオヤの慈悲の光明を點する時は、靈的の光明、燈りつゝ、赫々として威力ある意義ある光明中の生活を爲すことが出来る本能を具有て居る。粘土を蠟燭の形にして之に火を點しても燃るものでない。人類以下の動物なる犬や馬に知識の火をつけやうとして如何に教育を施すとも、彼等の土蠟には知識の火は燃らぬ。況んや宗教的靈的の信仰の光明はつくことばできぬ。人類は

知らず。宗教の教を以て之等に信念を修養すべく指導し、如來の光明の人の心盤に燃つ時は、其の信念が初めて活潑に活て来る。蠟燭にても火が點せぬ間は、まだ活て居らぬ。但に火がつく時は赫々と燃えて活てくる。人は信念が靈的に赫々として燃るにあらざればミオヤの使命を果すことができぬ。人は信念の火がまだつかぬ間は、人生を盲目的動物的に見ておる。自己の輪廻する處罪途に在る哉自覺せず。また、今現に、自己は何の爲めに活つゝある哉を自覺せず、只飽まで食ひ肉に活ければ既に足れりと想へり。心盤究しく損するも敢て惜くおはす。
靈に燈りつゝ、人生は、ミオヤの光明の大道を有終の美ある至善の都に達する向上の一路なるを自覺せん。人生の自覺他にあらす、自己心盤の蠟燭に如來の光明の火を點し靈に燈りて人生の行路を取る。自己の信念に燈りつゝある光明、之れ人生の自覺なり。信念の光の外に自覺あるなし。曰く既に人生の使命とは、自己靈性的蠟燭に光明を點して自覺の生活之れなりと既に

知れり。然らば我等が心は如來蠟燭に如何に意を用いて如來の光明を得べきぞ、願はくば其の方法を示し給へど。答へて君が心盤に如來の光明の火を點せんには他なし。即ち念佛三昧である。念佛三昧とは君が一心に佛を念する時に、佛の心光君が能念の心に加はり心に相續し、念々如來を憶念する時に、所念の佛光能念の心に加はる。既に人の心盤に如來の光明念燃つきたる時を信念發得と云ふ。既に發得する時は蠟燭に火のつきたる如し。念佛の安心即ち心の安置方故大事なり。甲の蠟火に乙の蠟火の心先を接觸するにあらざれば、甲の火が乙の蠟に傳はらず。
念佛三昧が一心に心を探りて方を一にし、心を一心に彌陀を念じて餘念を交へず、専ら心に相續して彌陀を念する時は、乙の蠟の心が甲の火に接觸するが故に火を傳ふ。七覺支の中に擇法覺支即ち是なり。乙の蠟の心先を甲の蠟火に接觸するが故に火を得ること能く思ふて知るべし。
されば釋尊は彌陀佛眞金色にして端正無比なりと

波斯匿王女金剛形醜念
佛力と以て殊勝に改る

令衛國波斯匿王の大夫人をマリと名く。一の女ありハシヤラと名く、其面貌醜陋にして、肌膚粗澁なること醜皮の如く髪は馬毛の如くなれば王はこの女の醜陋を見ることを好まず。宮内に勅して一室に入れて守護して出ださず、すべての外の人に見るを得ざらめたりき。女は年益々長じて嫁せんと欲す。王は東臣に命じて曰く、汝家姓の貧者を推し求めて、こゝに誘ひ來れよと。臣は命を承けて探り求めて一の貧窮なる森姓の士を得れば連れて王の所に至る。王は尙かに説き玉ふ、汝を招きしは他に非ず、我に一の女あり面貌醜陋なり、若し是を納れて妻とせば財寶を供給すべし。能くこれを納むるやと。長子長孫して曰く、欲しみ王の勅を蒙りて背き奉らんと。王は女を以て彼の貧に妻あはす。爲に宮室門闈七重を起して是に與ふ、王は

想へと示しなされたのは、眞金色圓光徹照して端正無比なるは最も行者の注意を惹き易し。こゝに一心に專注すべきなり。また觀經に佛の自毫相之のみに專注すと云ふも、人の心意は一塊に集中するに惹き易し。心が統一せず、亂想を以ては三昧惹き起し難し。されば導師は失意野盲瘖癡人の如くならずば法門開け難しと示されしも、此の一心の蠟の心先を甲の蠟の客體の火の一塊に注めしむる爲である。如來の靈に接觸せざれば自己の心盤の信火傳致し難し。己に信念の光明を發するを得ず。此の光明は蠟燭と火との關係の如し。蠟を離れて火燈はなく、火を離れて蠟燭も燃らざるの火なるか將た火の蠟なるか、如來の光明は人の心意を發せしむ。人の靈は如來の靈火點じて始めて活るにいたるなり。人は天のミオヤの使命の下に人生の靈に活きて人生の使命を果し給へ。人生開闢の中に我り去らば、永遠の間無即ち蠟に點せんこと必せり。

女の夫に勅して自ら戸を排きて若し出する時は汝自ら閉ぢよ。他の人に女の面狀を見する勿れと、王は女の夫の爲に財産を供給して乏しきならしめ又拜して大臣の列に入る。其人の財富かなる諸々の靈姓と等しければ共に宴會をなして毎日に更爲す。會同の時には何れも妻を携へて來會す、然るに彼の大臣のみは獨り往くこと數年衆人疑して彼の人の婦は若し容貌美なるか又は醜陋なるかを知らず、或は醜陋の故に連れ來たらざりしならんと、密かに共に相語り切りに酒を勧めて醉はしめて門扉を解きて其門戸を開かんとした。時に彼の女は獨り憂懼して自から身を賣めて、我何の罪咎ありてか斯く夫の爲に憎まれ幽閉せられて衆人と共に語ることは能はざるや、又自から念じて語る、聞くならく佛は世間の衆生の爲に利益を施して若厄を度ひ給ふと、便し至心に懇請して遙かに世尊の在ます方に向ひて禮し奉り、唯願はくば世尊よ我愚蒙を啓み我前に下りて我に教を垂れ給へと、至誠懇然に祈り奉る世尊は遙かに其意を知らしめし即ち其家に到り、其女

の前に於て現出したまふ。女は佛を見奉り心に歡喜を生じて恍惚とする時に彼の女の醜態なる相貌は忽ち化して身軀醜態にして極まりなし。尙佛は是を惡み玉ひて爲に妙りて説き玉ふ時心の内の諸の惡を盡して法眼淨を得たり。

彼の五人の士等は戸を開きて内に入れば容貌美なる端正双びなき婦獨り正しく座するを見て、斯くの如き美人何故に連れ來らざりしにやと、あやしむ。彼等は還つて門戸を閉じ鍵を以て本の帯に懸き置きぬ。其人醒めて會終りて家に幸り婦の姿容甚だ麗麗端嚴なるを見て喜びに耐へず怪み向ひて曰く汝に何人の女なりや、答へて曰く妾は是れ君の婦なり、夫の曰く汝は先に極めて醜かりしに今は斯く端嚴なるは何故ぞ、女は其に上上の事告げれば夫は王の前に詣でて申さく、大王よ我婦今は佛の神恩を蒙り、前の醜態の姿は變じて端正極まりなきに化すと、申し上げれば王は女を連れ來れよと命じれば女と共に宮に入る。王是を見玉ひ不審てこの女宿世何の福ありてか蒙當に

生れて其面貌醜陋かりし。佛王に告げ玉はく、過去世にハラナ國に長者あり財富無量全家共に喜びて一の縁覺聖者に供養しけるに其聖身體醜陋にして醜陋ければ彼の長者の一の女子彼の聖を見て惡心輕慢して罵り毀ること甚だし。其聖者入涅槃の時にその積徳の爲に十人變を曳き空より下りて其家に至る。長者信く喜び女は深く前非を恨みて懺悔して唯願はくは尊者よ、我罪を恕し玉へと、群支庶(緣覺)其懺悔を受けぬ。

佛のたまはくこの時の女は今の王女にて賢者を毀容せし爲醜き形を受けしも後神變を見て自から改悔の故に端正なるを得佛を供養するが故に世々富貴にして今は始めて端正なるを得たり。

◎白衣の菩薩に

如來の聖意に清められ、罪愆によりて清き生れ觀音勢至の勝衣に圍まると泥中の白蓮たる高橋優婆塞に

まで白す。實に希有なる上善人よ、此三月三昧會中に斯の芥利華を白衣の中に發見することを得たりしは深く如來に感謝せざるを得ぬことにて候。白衣の菩薩よ、其折申し述たる如く機教相應とは佛教の格言、彌陀の大慈も自力教的の階には只現世所稱の稱名と信する。されば山家の大師も現世利益には念佛に如くはなしと教へ給ひ、又百萬邊の念佛は息災延命病即消滅の功徳ありと説かれたり。次に超自然教の人は彌陀の本願念佛は死後往生のみの特効劑の如く見做される。然しなから彌陀は絕對無限の威力、無縁の大慈悲者、圓滿の徳不可思議者なれば、若しは現世、若しは未來と云ふ局限あるなし。それは相對的に規定せらるる所の人間そのものに有する偏見のみ。絕對なる如來、何ぞ夫れ過去現在未來の局限あらん、开は人間自から障壁を造りて自己の要求を願ふなり。されば自から我等は逆も現世に於て證人の分にあざれば、せめて此肉體の壽命終りてのちこの靈を稱樂の淨土におくることを期する人の爲めに彌陀は死後の大慈悲者と見え、ま

た現在より如來の大光明中に靈的生活を要求する人の爲には絕對なる大光明者は歡び迎へて光明中の入となし玉ふ。淺きせまき人の心を以て絕對なる如來を見るは半面より窺ふこと能はざるなり。されば我等は第三期の絕對光明中に現在を通して永遠の光明界の人となることを期す。何れを是とし、何れを非とせんや唯その機に隨つてその見解を殊にするのみ。

◎念佛者の二動機

先づ彌陀三昧會より歸來の後さるる信者よりの間に、先づ彌陀三昧會一方の教師は唯往生稱樂の爲に口に名號を唱へよ、唱ふればその功徳にて死後に往生すご教ゆ一方には只偏に絕對的の大人格なる如來をば御名を通じて大人格に接せよ、現に靈に活くる如來の靈的光明に觸れて現在より活きよとの教の中、何れを取るべきやは吾人の大いに感ふ所なり、余は之に答て云はく元來如來は絕對にして現未の差別なし。然して我らは本願の念佛に依るとは、本願の念佛とは、我等が南無と呼ぶ聲を現に聞き玉ひて直接に報ひて心光を以て我

(5)

を光化し玉ふ。如來を念する所に本願の意義あることを信す。今現に我らが肉體の活つゝあるは現に我らに光變化を與へ給ふ太陽の力あればなり。その如く現に念する我らが心靈に對する太陽の如き無量光如來の心光を被りて、我らが信念は靈に活くるなり。我らは靈に活つゝ永遠に向ふ生命の信仰である。小兒が泣く聲に慈母の乳房を與へられて靈の育てを受けるなり。されば聖善導は「口に佛をよび奉れば佛開玉ひ、身に敬禮すれば佛眼開かに見玉へり。意に念じ奉れば佛はこれを知り玉ふ。我らがミオヤを憶念し奉ればミオヤは我等を憶念し玉ふ。彼此の三業は剎密にして須臾も離れぬなかなる所に念佛の眞意あることを教ゆ。

二の導き方、甲は念佛の功徳を信じて極樂に往生すべしと教へ玉ひ、乙は彌陀の大人格を信じて慈悲の御名を通してミオヤの慈光に觸れ、現在より靈に活きよと教ゆ。我らは慈ひぬ、二つの中何れに依るべきやこれに答へて、何れを是とし、また非とするなし、其機體に相應したる方に依るべし。然れども我等如き間

◎祖山三昧會に於ける決定事項

去三月祖山三昧會に於て、全国各地よりの出席者をその地方の代表者として種々相談の結果、左の數項だけ取り取えず決定し尙詳細に渡つては今後の相談に譲ることになりました。右御承諾の上今後の方針その他種々のこと皆様各自御考慮の上、來年の三月を待たずとも、本紙上或は主監のもとに御健康の程願はしく存じます。

一、笹本上人を全國光明會の主監とし、故上人に代つて信仰事業其他一切の中心と仰ぐ事

一、全國の聯合事務所を京都府相樂郡水津町正覺寺に置き同寺住職井上隆森師に事務萬端を依頼すること

一、全國光明會計主任を恒村京八氏に依頼し會計本部を京都市聖護院局前同宅に置く事

(前項役員任期を三年とす)

一、各地光明會主任を以て評議員となし、毎年三月祖山別時會の際集合相談會を催し方針事業其他を談合すること

一、機關雜誌として月刊「ミオヤの光」を續刊する事

(7)

き弱き拙き惡ろき輩は現に離るることなき大悲の親を離れては小兒の育つことのできぬと同じく大悲のおや様を精神的に離れぬやうにミオヤの御育てを仰ぐ外なき者なり。おもふに彼の無爲泥道の淨土に生れての後には寔に惡き御國と聞つれば、假令如來を離れても或はよいかも知らぬ。然れども此世に於ては我ら如きはさうしても大悲の親様を離れたらば實に危きもにて候。されば我等は無量光如來を一の親と仰ぎ、ミオヤの聖意と光明の御名を呼び、あなたたの光明を被り、光明の御育てに預り、光明のなかに生活させて載せ、而ていよく命の終りには光明の御許に進みゆくことに疑てもさめても光明名號を稱へて光明中の生活に入り現在を通して永遠の光明に進趣せんことをぞねがはし。されども意樂同じからず必ずしも萬人同じかれとは言はれ難し。

宗祖法皇上人の宗教的の理を窺ふに皮肉官問あり。宗祖の御傳を聖光上人傳傳と此較すれば聖光上人は正しく宗祖の御傳を承へられたる上の傳傳、御傳は天台の傳傳法印の及より見たる見聞の傳傳なれば正に宗祖の眞髓を窺はんご欲せば二祖聖光上人の宗等に依るべしと存じ候。

靈夢

神奈川縣 岡本真丁

私はまだ親様に懐かれてゐる期でありますから、鳴き聲を揚げて皆様に申し上げるべき資格はございませんが、一夜の靈夢にて解化せられたやうな感じがして、聲を揚げる次第であります。

不肖は二十歳の時石川素童禪師の著された「夜明の籠」と申す御法話の書いてある本を購求致しまして深く心に感じ、自分もこの戒を授かりて此の機の上で成佛したいと念じて居りましたことが四皇霜でありましたが、佛智は誠に不思議で四年目て山崎辨榮御上人様より授かることができたのが三年前、三月二十五

日の今日と想ふて寝ると、時刻は何時頃か、夢に天樂を奏せらるゝを暫く聞くと、山崎御上人と共に登山するのであるが、登山の途中不圖御上人様を失ひ、當惑しながら獨りで登る路は幾路かあるから道を尋ねんと思ふとも人はゐない。ピタ／＼しながら足を進めると間もなく頂上に登れば莊嚴なる宮殿がある。やれ嬉しやと中へ入ると途中失ふた御上人は最早や在まじと大衆と共に食し給ふ。我も早速足を洗ひ御上人の許に行き三拜して共に食す。食了りて我は一の談話をすると御上人には思ひの外の大歡喜にて、我に向はせられ合掌せらる。有難やと我も御十念を授かること、合掌すれば大膽にて手をパン／＼と打ちつゝ「頂上々々」と充天滿地の御喜悅遊ばされて御十念を授かりましたから、最早散會のことだと思ふて居りますと、猶も御上人様より「眞了よ『念佛衆生必定往生』と親しく御殷勤なる御教化を仰ぎその上に『眞了よ、此の世には路が多くあるが他の路に迷はず、只管念佛の一路を眞直に來れ、必ず成佛す』と曰はれしに打ち鳥さ夢を

醒めて目を開くと御上人は充天滿地の御顔にてニコニコし給ふを拜す。我南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛と念じて居りますと御上人様と一體となりて意に能所亡。我は毎夜々々名號の功德に寝ねて佛智の不思議に起さんとする今日の朝、上人消え給ふと復た三尊の現前し給ふを拜しました。我は恒に御上人を念すれば、常に上人現前し給へども、御教化を蒙りましたのは今が初めてであります。世の同胞衆よ、御上人も亦今現在說法し給ふ。夢々疑ひ給ふな。共に與に念々念佛三昧を修せんかな。三月二十日の夢に………阿彌陀佛と樂ふ心は助けるぞ。このねの相あり／＼として往生は世に易けれど衆人の信の一念無くばかなはじ阿彌陀佛と親の願力信すれば永の迷ひの不思議はかられぬありがたや佛智の不思議はかられぬあはねば知らぬ處と思はん

十四歳の少女母上への手紙

拜啓 南無阿彌陀佛
三人は仲よく母様の御歸りを樂みに待つて居ります。私は毎日暇さへあれば御念佛を樂しみにして申して居ります。この頃は一念々に變化せられ、そして一々慈光中のミオヤの許に攝められて居ります。有難いとも／＼いつも歡喜の極みでお念佛申せるやうになりました。そしてお念佛中、長い／＼對て頭の中を突込むやうな痛さが時々ござりますが何故か………何時も如來様の本願の御念佛の網にしっかりとつかがつて居れば決していやになるものでございませぬ。然し聖旨にかなはんお念佛はござうしてもいやになりやすいです。一心歸命の念佛は無我無心です。年若き私で、お母様の留守で商賈し、やかましい中から離子になつたら、よい／＼の hands となつて思ひますから、留守中に離子にならなければなりません。それで私が留守を引き受けますからなるべく長いこと居つ

て下さい。若し留守中になれなかつたならば、自分の分別を授け捨て、學校のことは第二にして休み中一生懸命に申して離子にならうと決心致しました。今は我が生命の助かるか助からないかの境です。離子にならぬ先から聞けたら如何ばかりの喜びぞ、父母に孝行が出来、兄弟仲よくなれる、何事も歡喜に充ち／＼てできる環のことが思ひ浮ばれて本統に嬉しいです。こんな嬉しいことはありませんよ。きつと休み中になれると思ひます。お念佛はどれ程好きになつたか想像することが出来ぬ位です。………略………
三月二十八日
母上様
南無阿彌陀佛
二月十日
南無阿彌陀佛
私は私の周囲の一切のものに感謝する。私の周囲の

日誌の一節より

谷 安 三

御遺骨改葬の事

恒村 夏山 記
故上人様御遺骨式を兼ねたる祖山三月の御別時は遠近各地より集まれたる道俗の方々の熱烈なる稱名の内に無事七日間を修了しました最後の日に崇嚴なる儀式が行はれて故上人様の御遺骨は真葛ヶ原なる勢至堂の墓地へご假埋葬になりました。何分急に相談が轉りましたので未だ墓地の整理も行きて居りませぬので朝夕雨につけ風につけ御墓の事が心にかつて

なりませぬ。そこで皆様に御謀りする暇もなく本山の桑田上人様へ御依頼をしまして愈々正式に改葬することとしました。御遺骨は内空一尺五寸立方厚さ三寸の總磨きの石棺内に納むる事とし蓋の下面には佛陀羅那辨摩上人遺骨、横に大正九年十二月四日入寂と桑田上人様の御筆を彫刻し且つ御遺骨の靈は更に外筒の蓋に納め其の間隙には木炭を小さく砕いて透間なく埋め蓋の上口は厚き石の蓋を爲しセメントにて固めまして石棺の中に納めました埋葬を終へましたのが三月 日でした桑田上人小早川運秀師それに垣村兩人が立ち會ひまして一同稱名の内に無事終了致しました。是にて皆様に御安心の事と存じます。之れについて一つの因縁話がございます。上人様御遺骨の石棺を受け負ふた石工は貝島と云ふ本山出入りの人でありました。恰度御改葬二日前小早川恒村の二人が立會ひまして御遺骨を發掘しました後石工の一人は「若しか此の御方は辨摩上人と仰しやる御方ではありませんか」と問ひました。妻が「そうであるならば、それならば今から三十年前印度へ御越しになりました御方ではありませぬか」と申します家内も不

思議に思ひ「其の御方です」と申しして別れました。二日程立ちまして愈々御埋骨の當日五十六とも見えぬ女主人が見へまして涙乍らに奇しく因縁を話されました。此の女主人の父親と云ふのが佛の善兵衛と云はれる位な念佛僧者でありまして、或る日年若き三十位のそれは美しい御僧の御件をして歸られしました。一見して尊い御方と見へました何でも近い内に印度へ御渡りになると云ふことでした。父親の崇敬一方ならず御二泊程遊ばして御立ちになりました。其の時一室に人を退けて御書きあそばしたのが御經文にて書きたる釋迦三尊様の御像と御名號外に御歌と都合三枚で、それを記念の爲めに父親へ賜はりました事を覚えて居ます。春風秋雨三十年其の間に父は亡くなり御上人様の事も定めし印度へ行き切りに遊ばした事と思ひ何時とはなしに忘れて居ましたが二三日前死んだ父親が夢にはれまして『手文庫の中を見よ』と申して消えました。翌日此の事を子に話しますと笑つて取り違ひませんが餘りあり／＼と見たものですから試みに手文庫を見ましたら、其時見つかりましたのが三十年以前に御上人様からいたされた件の御書でございまして。愈々之は只事ならず思ひ不圖思ひつき

會報

まして一昨且番頭へ伺はせました。遺憾かに其の御上人様でありました。聞きますれば其後度々熱室室にも御出でが御ありました。この事若し知つて居りますれば一番に御結縁致しましたのに、つい目と鼻との間に在り乍ら知らず過ぎてしまつたはまことに残念に思ひます。それにつけても此の事が父の夢の告げと知りました事は何と云ふ有り難い事せうとせうと涙／＼と泣き乍らの述懐でありました。私共一同も無限の感慨に打たれて之の因縁の不思議さをつく／＼感しました。之れから石工一同も心からなる敬虔の念で無事改葬を了しました。誠に奇しく因縁でございました。

會報

御上人に涙と共に御別れ申して、まだ百ヶ日も過ぎず、去三月一日よりの祖山三味會並に御納骨式は百六十餘名の熱ある遺弟道僧の念佛中滞りなく修し終りました事を喜び奉る。大殿にて御回顧の後念佛行道しつゝ、佛殿や御本廟へ御靈骨の御供奉をして歩む時の心地はなんぞなく尊嚴でもあり亦悲痛でもあり中にはす／＼泣つゝ念佛せらるゝもありて、愈々御埋骨の時には……感極まりて……「聖きみに」を唱和し奉る。此處を聖きみになりと爵着たる古木垂枝を

眺め樹の間より大空の隙間もる輝き、いとも尊く尊くりき。

第七日、尊き式を終へて後、雪香殿に於て茶話清談を交へ、法悦歡喜光裡に散會せり。定めし參加の諸見妹は塗上無異如來照護の下歸郷なされ、三味會に於ける甚深の法味を想ひ起しては一層御念佛に力込められつゝあるならん。

百華正に突みつゝあり、心華何を開かざらんや。冀くは無礙光中麗しき心華の開發されん事を。

○笹木上人、井上氏、恒付氏、夫是再三の御辭退でありましたが、これでは事務を執ることが出来ないため強いて御承諾を願ふ事になりました次第であります。各地にも種々御熱心な會員が居られるのですから役員任せにしないで、各々選ばれたるもの、自覺を持って慈光傳道に御盡力の程願はしく存じます。

○各地に於て定期月並御別時三味會を修せらるゝのでありますが、會員相互の參加の便宜上、或は講師巡回の架にもなりますから、是非次進行口迄に聯合事務所へ御通報を願ひます。

○本會の聯合事務所は京都相樂郡木津町正覺寺中と決定致しましたから御用向は諸般御通信下さい。(隆森) 右板替入版五七九五九番

次號より新に

發行所を東京に移し前宗教大學教授現慶應大學教授川中文學士に一切の經營をして戴きます。先生には別に御上人様御遺稿全集及び御傳の編纂を依頼しましたし、大學に於ける講義の忙しい中に更に本誌の爲め盡し下さるゝ事なれば、本誌の發展上に種々の計畫もある山なれど茲當分は毎號目新しい光彩を添ゆる準備が得られないさうですから、月々の雑誌は従前の通りとして、更に紙数を幾倍かにした臨時増刊を時々發行して、御上人様の御文及び門下の諸大家の執筆を待つて、雑誌は雑誌であるけれども全然一冊の纏つた單行本と同じくして、其一冊を手にすれば纏つた何ものかも領解して、しみ／＼と御光に感觸する念佛増進の助縁となるやうに、其の臨時増刊號を編纂する方針だそうです。

尙來月より右東京編纂所にては田中先生監督の下に會計に吉川幸正氏を煩はして會計事務を執つて戴き、

會計困難の從來及今後の誌料の整理をして頂きますから、御上人様の深き御思召により本誌原稿用の御上人様御遺文ノート數冊を御遺し下されし難有き御用意を御互に喜んで本誌の續刊に會計上の困難なきやうにして下さる事を御願ひ致します。

序に御願致します

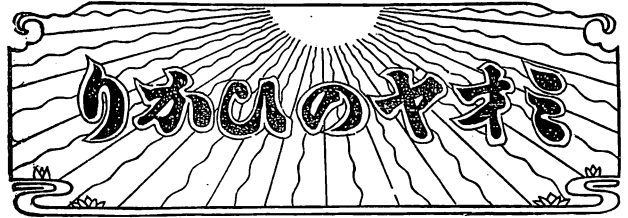
御上人様の御講録、御手紙、御歌、及び御傳の資料としての御好じの事實御書取の上、横濱市神奈川町慶運寺笹木上人宛てか或は直接東京の本誌發行所に御貸し下さいませんか、寫し取つた上丁重に御返却いたします。

如來様御影印講及禮拜儀は

東京神田駿河臺袋町八番竹内喜太郎氏實費を以て御願も下さるさうですから、京都の聯合事務所か直接東京竹内氏に御申込み下さい。實費代價は次號にて詳しく御公告致します。

大正十年四月廿五日印刷 (一回發行)

編輯兼 岩 品 誠 信
發行人 東京市京橋區本八丁堀一丁目十五番地
印刷人 秋 塚 熊 太 郎
千葉縣東葛飾郡松戸町二丁目
發行所 光明會松戸教會所
板替東京四九三八番



號七第卷貳第

大ミオヤ

日にあらた日々、あらたに改めん
 階えぬひかりに照らさるる、
 つゝめどもおのづこにあらはるれ
 彌陀のひかりにふれしこゝろは
 大ミオヤは子らを招きて永遠の
 世をつがさむのみむねなりけり
 かぎりなき光の中に永遠の
 つきぬき霧に掃めすなり
 すゝみ行く道の遠きもおほへす
 たかねの月の見まくほしさに
 あくがる、御名は呼べども雲暗れて
 いつ見まつらん月のおもかけ
 みをよぶ聲に心の水澄みて
 月の面かげやざりぬるかな

宇宙には一切萬物の中に萬物の大本となる大ミオヤ在ります。此大ミオヤを信じて之に歸命信順するの宗教である。故に我佛敎では釋尊は形は人間に身を受け玉ひしかども其御本體は宇宙の中心本尊にして本有常住の法身佛に在ります。其法身より身を分けて此の娑婆世界に御出ましなされたのである。故に釋迦尊は形の上より拜すれば人間の佛なれども其の御精神の内に於て見れば宇宙全體が釋尊の心なので其中心に盧舍那如來と云ふ無量の相好光明を以て普く十方世界を照し玉ふ御靈體に在ります。其靈體のルシヤナ如來と肉體形の上に現れし釋尊とは外より見れば別のやうなれども其の内面に入つて見れば一體に在ります。故に釋尊は其の内觀の一體なるよりして三界は我有て其中の衆生は悉皆吾子であるといひぬ。一切衆生は其の毘盧舍那と云ふ法身佛の分れたる子である佛性を有つて居る。けれどもまだ子は赤子のやうなものにて佛の性は具て居るけれどもいまだ御育てにあづからざれば佛の子としての働きは出來ぬ。
 鬼まれ如來は我等が眞の大ミオヤに在ませども久遠劫來大ミオヤを離れて只此肉體のみを愛して

— (2) —

心靈が御育てにあづかる事を知らずして乃至今日に至りて淺ましき凡夫の身と成つて居る。實に漸恥すべきである。幸に釋尊が大ミオヤの現はれとして此世に出て玉ひ、大ミオヤに歸命せよと絶叫し玉ひし御敎に遇ふことを得しは實に眞に幸福である。然るに世には一の大ミオヤの在りますことを知らず唯だ我見我慢のみを増長して今現に此の肉體の生活をして居るのも全く大ミオヤが天地萬物の設備を以て我等を活して下さることを何とも思はず、只自分勝手の手を張つて居る者の多いのには、大ミオヤに對して申譯なき次第である。世の中に親なき子、憐れむべきものはない況んや靈の大ミオヤを誑らすして人生を開闢裡に葬つてしまふもの程憐れむべきものはない。幸に我等は大ミオヤの招喚の御聲に驚きてミオヤに歸し、日々慈悲の乳房を含め哺育せられて益々大ミオヤの在りますことを眞に信認し得らるゝやうになりしことは偏にミオヤの御慈悲の然らしむる所と思へば何とも辱しなし。されば一切の同胞衆が大ミオヤの在ります事を誑らすして生涯を闇の中に葬つて仕舞ふのを見れば何とも憐れ同情に耐へぬ。何かして大ミオヤの御手に絶る様に勧めず居られぬされば世の同胞衆よ、すべて靈あるものは悉く我子であると仰せられし如來の聖意を畏み體せられよ。

◎あなたの前に在ります大ミオヤ

大ミオヤは天地間何れの處にも在ります。あなたは信じて居ますかまた信じませぬか。釋尊は如來是法界の面をあなたに向け玉ふて在ります。あなたは信じて居ますかまた信じませぬか。釋尊は如來是法界の身、一切衆生思想の中に入り玉ふと仰せられた。宇宙全體に周遍する所の靈體に在りますれば何れの處に在りまする所なく一切衆生の思想の中に入り玉ふなれば、君はいかに注目して如來を見奉らんとおもふも、如來を瞻奉る事は太陽または月を瞻むやうに外から外界に心を注いでも瞻めませぬ。本如來は絶対の靈體にして大智慧の心として一切處に遍滿し玉ふ。只あなたが一心に念佛する時あなたの心靈に入り而して之を投映する時に客體化して現し玉ふ。

◎近縁

如來の眞法身と念佛者の心とは最も近い。どんな物よりも近い。いかにとなれば一室に在つて障子を隔つれば早や室外は雲外萬里の隔てがある。またそれよりは自分の掌も若し閉目して險一杯隔つる時は掌中の物も見えぬ。然るに我等念佛者の心眼の前には虚空遍滿の法身が扉を閉ぢたる中に於ても明したるに見えて、それよりは近く、たゞへ閉目しても了然と見ゆる。されば臉の中よりも近い。之は直觀的に吾人の心靈と如來とは實に一體不可離の關係を以て炳現して居る。實に近縁である。唯だ内心に念佛なくして唯形のみを求むる如きは十萬億土のみにあらず實に無限の隔てがある。

◎宗教の中心本尊

大ミオヤは三身に分れて在ります。雖も元は一體である。法身としては天地萬物の本體にして一切衆生を生み且つ活して下さる御働にて報身佛は私共の法身から受けたる靈性を開發し又煩惱を靈化する爲に智慧と慈悲との光明を以て念する衆生を攝化し給ひ、應身としては人間世界に御出ま

— (4) —

— (8) —

しになつて人類にミオヤの聖意を教へ給ふのである。故に歸する所は一體の三面に過ぎぬのである。大ミオヤより與けたる佛性は自分の力で之を開きて圓滿なる徳を顯すことは出来ぬ。又自己の煩惱の悪質を自分で解脱して完全なる道徳と變化することも出来ぬ。佛性を開發し煩惱を變化して圓滿なる人格とならんに報身無量光如來の光明を仰がねばならんと信ず。故に報身佛が最も尊いので宗教の中心本尊は報身佛である。

◎ミオヤを呼上げて御答が聞えませぬか

大なるミオヤは我十方法界を遍く照し、わけて我名を呼びて頼む者に答ふる心光を以て衆生の心に靈妙の輝を興へ玉ふ。さればあなたが一心に餘念なく稱名する時、あなたの一心彌陀に對して真正面に心を向け念する時はあなたの真正面に在ります。ミオヤはまた真正面にあなたに答ふるに靈なる輝を以てす。あなたに御答が如何に聞え上げられますか。それともまた御答の聲が確と聞え上げられませぬか。御答の聲が聞えられませぬか。もしあなたが聞えぬと云はば、それは何故に聞えぬのでせう。ミオヤはあなたを眞實に愛して在りますことなれば、能くも遣る潮なき親心を汝は思ひつきしぞ。眞實に汝が眞こゝろから吾ミオヤよと云ふて與ればよしと忘るゝ間はなきに、能くも我名を呼んで頼む心を發せしことよ思召す如來に在ませば、何ぞあなたの稱名は御答なき筈はない。斯やうな譯なれば必ず御答は有る筈なれども、あなたがよそ心の爲めに御答を自分と聞きはつして居るのかと思ふ。實に其深微妙なる御答の輝は、慈略な思を以ては聞え上げられぬ。

私には御名を呼び上る毎に微妙の靈感を以て答へ玉ふことなれば、ましてあなたに對して御答なき筈はない。然れば如何に心を致して御名を呼び上げれば、ミオヤの御答の聲が聞え上げられるであらうとなれば、私は斯やうに心を至して念じ上げ、また御答の聲が聞え上げられます。眞實に如來様は私の眞正面に在ること信じ、深く念ひ上げて、ナムアミダ佛と餘念なく、己が心の統一するまで念佛して居りますと、漸々に心も静りて餘念なく、只だ如來さまの御慈悲の面かけが自づと彷彿として思はれて來る時に、何とも云はれぬ辱けなき有り難さの靈感が感じられて來ます。これぞ如來の靈妙の御答であります。如來の御答は耳には聞えぬが、直覺的に心に聞えられるのであります。あなたも斯やうに念を用いて一心に心を至して念佛して眞正面の如來に向つて念じ上げ何時までも心の統一するまで念佛し、如來の靈響を聞き玉へ。始めの程は仲々二時間も三時間もかゝつてもそれはあなたの一大事のことですから辛抱なされ。段々に時間が短くも統一が出来て益々純熟するに隨つて遂には念佛しなへすれば、忽ちに三昧に入つて如來の靈響に充たされる妙境に入る事が出来て來ます。之即ち感應同交と申します。此の感應同交が宗教の唯一の機關であります。若し感應の聞えぬは、古人が、
祈りてもしるしなきこそしるしなれ、己が心に誠なれば。

◎誠

誠に消極と積極の両面あり。只偽らざるばかりの消極的計りでは積極の價値はない、積極的の誠

とは内容の充實した所にある。内容を充實せしめんには至誠心に彌陀を信じ、彌陀を愛し、世つぎたらんと欲し、其の内容の充實する所に價値あり。譬へば稻の果が能く實りて成熟せし如くに内容が出来てこそ眞の誠で、果が充實し成熟せし種子は播いても能く萌生々育す。我々が心靈も全く彌陀に成熟する時は淨土に生るゝ。種が熟せし如く生産作用の能力を具有したならば眞の價値ある誠である。誠に形式即ち容器である。即ち彌陀の靈徳を受容する容れものである。その容れ物たる誠の心がなければ受けたる徳も失つてしまふ。

如來を眞實に信ず。信は信受と申して如來の眞實を我心に受容するは信である。彌陀の眞實を信受する時は凡夫の身は卑しくも、至心の内に宿れる彌陀の聖種は眞に尊い。經に喩を以て、婢女に轉輪王の聖胎を宿す時は卑女の腹は卑賤なれども内に胎れる胎子は頓て輪王となるべき聖徳を有つて居る其の如く今凡夫は愚かなれども其信心に宿れる彌陀の聖種は後には頓て不退の菩薩として無上覺位に入るべき性を具して居る。斯の如くに我に聖種を賜る彌陀聖王に對しては實に愛樂せざるを得ぬ。また我等が愛の對象たる彌陀は最も圓滿に完全なるすべてに超した人格でなくてはならぬ。宇宙間に唯一無比でなくてはならぬ。若しもより以上的人格者實在すと聞く時は或は我等が心は動かざるを得ぬ。より以上的人格心を運らざるを保し得ぬ。故に我等が彌陀は威神光中最尊第一にして而も知恵と慈悲と及び一切の萬徳圓滿して一切諸佛に超へたる大靈的人格として神尊として尊敬すると共に滿腔の愛を捧げて彌陀を愛し敬して居る。すべてに超えし愛を以て只彌陀に容れられんとして居る。愛は生命である。然れば即ち彌陀は我靈の生命の源である。彌陀の靈格を愛慕して忘れんと欲するも忘るゝ能はざる愛樂である。毎日く東の海の水を以て面を清め洗ひながら昇る朝日の白のいを見ても直ちに最愛する所の彌陀の慈顔と思ひ出さざるを得ぬ。信ありて愛なきは甘味がない温みがない。我と彼との間に血が通はぬ。さればあなたの心の奥に彌陀愛樂の温みと聖き血とが我と彼との間に通うて居りなされるか。忘れんと欲すと雖も忘るゝ能はざる爲に身をも命をも惜みやはすと云ふ様な愛がありや否や。彌陀に愛慕して之が彌陀の御心に叶ひなば死する方に苦がなくとも足らぬでせう。されどそれ程に現れ居らぬまでも心の底には愛して居ると認めて居る。如何となれば今現にあなたの信心の生命は彌陀に依つて未來永劫をかけて生命として居る。あなたは免まれ如來の實在を信じてそれをあなたの永恒の生命として永恒の我なる生命は彌陀に在る事と信じ愛して今現に生きて居るのでせう。愛に於て若しも彌陀尊と云ふものは實在せぬと云ふ確乎たる證據が発見したならば、あなたの永恒の生命と頼みたる心はいかになつてしまふのでせう。夫こそは落膽失神してしまふのでせう。あなたは其の場合に左程に落膽しませぬか。若し彌陀の實在を全く否定するゝ事實が到發したならばあなたは精神的に死ぬでせう。彌陀の靈光明に繋がる生命にして前途永遠の光明として居る生命にぶつたり割断せられてしまつたらば如何なるでせう。それでも此の肉の生命さへあればよいと平然として居らるゝでせう。若しも其の堪合平然として居らるゝならば、あなたは本より心の奥底に彌陀と繋る愛の生命が

生きて居らぬ故であります。

斯やうな工合にあなたの心の奥底に最大の生命として彌陀尊を愛して居るに相違ないに其の愛が内腑して居つて愛の熱が發しきれぬのかも知れぬ。或は其の内腑して居る所に却つて病氣が重いかも知れぬ。

徳本行者が「あみだ」と戀する人の胸にほごけの絶へ間ない」と詠まれたなかに彌陀愛慕の消息が洩れて居る。

宗教は自己人格の向上を宗とする宗教が高尚である。唯だ極樂の快樂を貪る動機のため宗教は悪いとは云はぬまでも人格向上の動機には遠い。彌陀と云ふ絶對的圓滿の人格を心の底から愛慕して其の圓滿なる光輝ある人格を常に離れず之に愛慕し信樂して心々念佛し、其愛慕する人格に同化して自分も如來に似合うやうに成ることを宗として信樂する所に宗教の價値がある。

二副上人の念佛三昧は不離佛值遇佛と申して常に佛を離れず常に佛に值遇する所に吾人を指導して常に光明中に行爲せしむる大なる力あり。されば如來を愛慕して常に念々佛を念じて離れざることを要とします。

南無阿彌陀佛

編輯の下僕 木 又

大なるミオヤは迷ひ子をふびんと思はず親心のやるせなき大悲より、十方衆生の胸より胸を貫いて或は悲に或は喜に見るものにつけ、聞くものにつけ、魂ゆるがす音をもて、斯くまでしても成長夜の夢を破らざるかと、日の出を告ぐる曉の慈悲の御胸を響かせ給へども、闇愚の我等之に氣付かず、身の皮一枚に天地を隔て、唯だ皮膚一枚に限らるる五尺の體のみを我が全體と執着し、産ぶ湯を使つた盥より棺桶に入るまでの生死の五十年に立つた波を、生命の全體と淺き篤な考へ方をして、眼の前の五慾にのみ没頭し損じた儲けた成功した失敗したと、唯だそは「として忙しい身すぎ世過ぎの日々の日暮しに追はれつゝ、盡十方に高鳴り渡る大悲招喚の御聲に耳傾げんどもせず、嗚呼「大ミオヤの御胸やすらう事なげむ、迷ひの子等のあらむ限りは。」

ざるを我等折角大悲に目覺めて居りながら、仰いでアナタの御慈悲に融け入るのみに安住して「大ミオヤは手等をさめてみづからと、同じさとりに入らしめん爲め」婆娑の荒陬石に我等をかけて、日々夜々に善かれと御心をくだき給ひ、淨化の光明を以て心の垢を照し給へども、或は僅の功に驕慢の心を起し、或は僅の勢に疲弊と懈怠を成じて「度我」の念佛喇叭を閉ざし生の上上に精進努力の脚みをつけず「迷ひの眼り」深からざれば「三世の春」に酔ひ込みて、念々稱名常懺悔の聖訓にやもすれば遠ざからむとす。あさましき我が姿かな。ミオヤに恵まれし此の生命なれば命を投げ出して歸命すとの有無の言葉は念々に申せども、無量壽の命に代へて頂く此の僅五十の瞬の命を果して我は投げ出して「命を歸へず」歸命の眞實ありや否や、白刃にも首を投出し、毒苦をも忍受する全生命をこめた念佛の覺悟ありや否や。ミオヤに濟度して頂く我ならばミオヤの「勅命に歸順して御心のまに動かむと誓ふ歸命の言葉は念々南無と唱ふれど、

口の言葉の如く「命に歸する生活を以て念佛する事實日に幾干あるか。ミオヤ攝化の光明名號は口だけにて攝化に答ふる譯にならず、生命生活を以て言葉と共に歸命し念佛してこそ、攝化の意味は徹るべし。慈悲のミオヤは無條件の大愛を以て罪のまの忘れし善等をそのまゝ赦し取り下さるれども、懐かれし我等が報恩の誠を表すには生活なしの言葉だけでは、御禮の氣は濟まず。名號は口稱なり、但し口稱に誠をあらはす生活の眞實は口稱に添はざる可からず。生活に表はる歸命なくして、法喜にのみ酔ひしむる事なりとせむに若しあらば、究竟大乘の念佛三昧と婆羅門教の念神と多く異なる所無きに至らむか。

大慈大悲の大ミオヤよ。希くは我に念々創造の生活を恵み給へ、日々「新」にして「深」にして「眞」なる生活を恵み給へ。昨日の是とせしことが今日の非と思はるゝまで我が念々の正見に大智願力の増上縁を眼に下飛過の一切の事相を通して恵み給へ。生活精練の道場たる「度我」の念佛三昧に執持名號一心不亂の聖訓に過はしめ給へ。我等拙き我執に封せられて、さや

を責めつゝ、御力に頼り頼りて貪賸の水火の中を突き進むひ細き道絶へ絶へに、危き我が生の旅、苦も樂も行先知れた汽車の中なれば、レールはアナタの御本願を護らせ給へ此の白道大慈大悲の大ミオヤ。

南無阿彌陀佛 南無阿彌陀佛

光明に恵まる、三つの實感

木 又

懺悔——歡喜——精進

御光に照されて——解して己を省る——懺悔——南無御光に照されて——仰いで大悲に融け入る——歡喜

阿彌陀佛

精進——南無阿彌陀佛

かなれど我にある力を用うれば之を自力と考へて、執着の上に自他を立てて、辱なくも久遠劫來可愛き子をばくみ下されし大悲の御恵みとして我に授け賜はりし力を自力と捨つる親の心子知らずの過ちに墮らしむることなく、自力も佛力、他力も佛力、一切佛力、絶待他力、の御恩をかこみてミオヤと信なる喜びの努力を我に賜はしめ給へ。

産みの我が子の可愛さに久遠劫來しばらくも休すうことなき御心の止むに止まれぬ御本願に衆生濟度の加被力を垂れ給ひ、無量無邊の光明に大智慈大悲大威神力の三徳を恵ませ給ひて、念佛衆生を手づからみづから攝め取り懷き上げ下されて現世より盡未來際衆生淨化の妙用を施し給ふ。

懷かれて仰ぐミオヤのまじりに、こぼるゝ慈悲をかしてみて、本願の名號、聲の足取り速かに念佛三昧五寸白道をまつしぐら、ひた走り行く吾が念に、風のままに立ち騒ぐ餘念除想のさざ波はある處に打ち任せ、はかりも所詮かひ無き我が力。たゞ泣きつかむ慈悲の御袖に、すがり寄り絶り付き、唱ふれば聲に心が載せられて、やす／＼運ぶ念稱是「一の無碍の道」「一心來」聲する方を眺むれば、慈悲の御親ぞ待ちわび給ふ、有り難き氣強よき心強よき、我執我愛の顛倒の「我」を大慈大悲の流れにとろかし、御心の就るに任せて頼らむ、親は吾より吾を思へば、御心のまに吾を導き給へ、御心を吾が上に成就せしめ給へ、萬

南無阿彌陀佛 南無阿彌陀佛 南無阿彌陀佛

念佛衆生の心の奥の奥底まで、しつぱりと徹うさせ給ふ大悲の温めりに、潤う吾等が涙びの中に在りて、恰も三百の鉢を以て突きささいなる、如き嫉きあり。故上人心をえぐりて宜はく、

「大ミオヤなる如來は我ら一切衆生の心鏡を照はしく染めなされんが爲めに、清淨歡喜智慧不斷の光明を以て永しに照し玉ふも、我等は其靈光中に在り乍ら、只世の五塵六欲に眼に耳に染汚されて幾年月を経て彌阿の靈光に淨化せらるゝの光榮をなすこと能はで、來る秋も來る秋も空しく過ごし、再ぶ得難き今日を徒らに暮し行くこと實に慚恥に耐へざる處なり」と

釋尊は淨玻璃鏡に吾等が醜き姿を映して無量壽經に宣はく
「強き者は弱きを伏し轉た相剋賊ひ——都て義理なく

飲食に度りなし——
佛指之を哀れむ。威神力を以て衆惡を摧き滅して善に就かしむ——
汝等是に於て廣く徳本を植へよ、思みを布き施し恵んで、道に禁を犯すこと勿れ、忍辱と精進と一心ご智慧とを以て、轉相ひに教化へて、徳を爲し善を立てよ、心を正しく意を正しくして齋戒を行つて清淨なること一日一夜なれば、無量壽國に在りて善を爲すこと百歳なるにも勝れたり」と
又無量壽經を通過して大ミオヤは君子の上に御心を添へてのたまはく、
「其れ至心あつて安樂國に生れんと願はん者は智慧も明達も功徳も殊勝るゝやうに心せよ。心の欲する所に隨つて經や戒やに虧負きて人の後りへに在ること勿れ」と
如來の勸命いとも畏し、這へば起て、起ては歩めの親心、辱なし、勿體なし有難し恐れ多し。吾が爲めと思ひてそむく親心、親は吾より吾を思ふに。吾はたゞ

法度に願はず、奢り經らにして橋より縦まに、各意を快うせんごのみ欲ひ、心に任せて自ら恣に更相に欺き惑はし、心ご日ご各異にして言ご心に實無し、候語ひ忠ならずして、言を巧みにして欺ひ媚ひ、賢を嫉み善を誇り、(乃至)更相ひに欺き誑かし各々貪欲慳嗔愚癡を懷いて、自ら己のみに厚うせんご欲して多く有たん事を欲し貪る(乃至)富行なれども慳み惜んで背て施し與へず實を愛しいや重く貪つて心勞れ身苦む(乃至)常に盜心、を懷いて他の利を情望む——但だ經歎な事を念ひて須ひ胸中に滿つ。——兩舌をつかひ惡口を六ひ妄言を云ひ誑を給人を誑賊し聞亂して善人を憎嫉み賢明なる人を敗壞ひて傍にみて之を快として喜ぶ二親に孝せず師長を輕慢んじ朋友に信なく誠實を得難し、而も性質自大つて己れ道有りとおもうて横しまに威勢を行す——思に負き義に遠うて恩を報償う心なし貧窮困乏なれば紙に奪ひて、之を放恣に遊び散らす、しばしば虚に得ば用いて自ら賤給はし、酒に耽り美を嗜んで

(13)

業に催されて過去の業や習慣に押さるゝ煩惱の力のみを我と盲滅法に執着して大ミオヤの大智願力に引き立てらるゝ力を余所事となし捨れば燈る電氣の光を捨らすして、唯だ闇きに乘じて横しまに進む。たごへ押す力と引く力とを俱具に感ずるまでには至つても、恰も梯子段の上の一段に片足をかけ、残る片足で下の一段を踏みし如き心持にて揚げた片足は浮足で、下の一段に踏みしめた残る片足に全身の重さを托して居る位に、いつまで立つても梯子段の登れる道理なし。懺悔のとも綱解く事なくして船を押し、精努力に下の片足を離らすして揚げた片足を浮かす故、如來の勸命に隨順すると云ふ歸命の誠が生活に顯はれぬなり。這へば立て立て止めの親心を以て日夜に威神力の光明を吾が上に恵み給ふ大悲の、ミオヤよ、希くば吾を起たしめ給へ、吾を御旨の上に歩かしめ給へ。さるにても心の暗まで照り徹し給ふ光明に照らされて、まことに吾と吾身を告れば、あせつても嘆いても瓦は瓦、鐵は鐵、垢鏽だらけの、此のまがアナタの

(14)

佛知見大圓鏡の姿と思ふとき身に粟立つ計り恐れ多し。日々夜々する事爲すこと唯だ親様に汚染を付ける仕ぐさのみ。不孝の子なる罪の背に開かれた眼前の道は、たゞ眞實至誠の懺悔あるのみ。痛烈切實な自己叱責の思のみ。
仰いで法歸命の誠を大悲のミオヤに専念に捧げ奉り解しては自身の罪業を痛烈に懺悔す。希くば念々稱名の足の運びに任せて實生活上に私心を空うして御心を就らしめ給へ。智慧と慈悲と神力との光明を以て一切衆生を淨化し給ふ最尊第一大悲大悲の大ミオヤ。
南無阿彌陀佛 南無阿彌陀佛

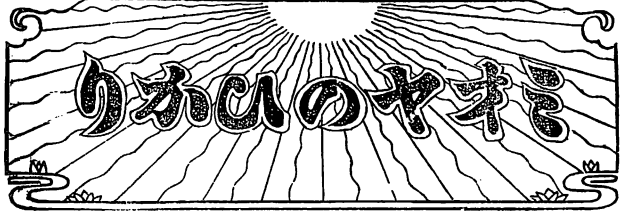
鏡面の沙字

南無阿彌陀佛は生活なり理論にあらず。靈性の體驗なり教學にあらず。口稱の實行に伴ふ實感なり組織にあらず。
學問は白紙に黒字を書き行くが如く、念佛は明鏡の表に散した沙の上に指もて文字を書かぬが如し。
理論の黒字を積み行けば白紙は遂に黒紙となりて、

文字そのものさへ見えなくなる。還愚實行は學問の極致實際化せざる學問に未だ達する所に達して居らざるか或は方法を誤りて居るべし。輕業師が百尺の棒の上を脊なり腹なりに當て、兩手兩足を打ち離し、自由自在に輕業を演じて居るを見よ。竿に握まつて居る間は此の業は出來ず。竿頭に手足を離した時に自在の活動を生ずるに非ずや。愚痴に遠つて唯一向に念佛すべし此の聖訓は元祖四十三年間開の竿登りの御苦勞の賜として萬代不易の眞理は唯だ一つあり。そは眞理は萬代不易ならずと云ふことなり。
眞理は成長す。發達するが故に眞理なり。生命ある眞理は必ず更に創造を其の延長線上に待ち置く。眞理と判斷する頭の持ち主は凡夫ならずや。學化石して型に依る。古新を穿れざる所以なり。恐る可きは唯學無修の偏見。
念佛を理論に開けば八萬四千、一代の教説悉く念佛の哲學。念佛を實修に閉れば不立文字。愚痴に還りて唯だ一向。
説に偏執する勿れ。行に熱執せよ。執持名號一心不亂の外に仔細は候はず。炯然たり燦爛たり這個の金言。

(15)

OC 版資料 五部 前金五錢 郵務五部一々年 半金郵稅共金六拾錢
五部 後金五錢 郵務五部一々年 半金郵稅共金六拾錢
大正十年五月廿五日印刷發行(毎月一回發行)
編輯兼發行人 村 禪 定
印刷人 東京市京橋區本八丁一丁目十五番地 耶
發行所 千葉縣中野區新松町二丁目 松戸 教會 所
電話 東京四九三三番



號八第 卷貳第

天は何ともいはず
春は芽生て夏しげり
ミオヤのをきては意なき
まして心の有る身より
萬のものをいづくし
神聖正義をしめします
恩寵を御名に表はせり
救ひの御手に攝められ
常恒に閑けき心地して
もはや此身は終りなき
悦び勇みて日々々々に
常に威附の心もて

四時は常を過まらず
秋は實りて冬收さむ
草木も守りて違はじを
仰げば彌よけしな
心を照す靈光は
罪にはろびし我等には
稱へて聖意を信願りなは
光の中に潔きよく
安くぞ此世を暮さるれ
森の中の生命ぞと
聖き御むねを授みて
命せの職をばげまむ

上人御遺稿

略 玄 義

歸命無量光菩薩、
獨尊統攝歸趣の義に、
物心無礙超時空、
内に無量の徳を具し、
生産門には法身の、
因縁因果の律をもて、
攝取門には性起なる、
衆生を撰擇攝取して、
如來絕對圓實性、
展して世界相待性となり、
因縁性より三展し、
極小各自の伏能は、
生物進みて人となり、
如來は自性絶待の、
報應二身を現じては、

一身乃至十佛身、
偏、依の依たる圓實性。
萬物内存心靈態、
自然心靈二界あり。
一切知能が天則の、
世界と衆生を發展し。
法、般、解脫の徳をもて、
菩提と涅槃に歸趣せしむ。
屬性一切知能より、
十方三世に相開し。
個々分別の衆生性、
互に競うて進行し。
理、靈の二性を自發せり。
心靈界に攝せんと、
歸趣の理性を顯せり。

遠求二心は神人の、
光明攝化の終局は、
絶待觀より相待し、
十方三世心は、
一大理系に枝條を爲し、
自治統制を自我とすも、
體用相即相入の、
重々無盡の交渉に、
五藏五塵は業成の、
佛慈靈妙の感覺は、
一切智能は天の則、
大道自然に行はれ、
歸趣には無礙の大道が、
本願不思議の力にて、
神聖無上の命令は、
正義は撰善捨惡にて、
恩寵は三縁の恵にて、

因縁力の理法にて、
本始不二とは成りぬべし。
物心二象は阿頼耶にて、
大圓鏡智の影像なれや。
大小差別に分れたる、
平等性智に統べらるれ。
識智は一切の、
生佛冥合は妙智なり。
所感は種々に異れど、
知所共に作智の用。
神聖正義恩寵の、
天命天恵とは爲りぬ。
衆生攝取の聖意なる、
靈我自由となし玉ふ。
道德律の基なり。
至善に向つて進ましむ。
靈を育みて聖子とす。

— (2) —

◎大ミオヤ

大なるミオヤは十劫正覺の曉より可愛き子を待ち詔び玉ふは假に遊きを
示せしものゝ實には久遠劫の往昔より今時の今日に至るまで可憐き子の面の
見たさまた子を思ふ親の心の知らせたさに番々出世の佛たちを御使はしなさ
れて苦心懇懃に子らに諭して、ミオヤの大悲の御手に渡し玉はんごせし、
久遠劫來の思念がかり大悲招喚の御聲に預かりし道士の至心信樂の心を注
ぎて慕はしき吾が

大ミオヤ、ナムアマミダ佛ミ呼ぶ聲を、毫も遠からぬ道士の前に在ます、大ミ
オヤはさぞかぎりなき歡びを以て之に報答しますらんご信じられて候。

道士よ、御名を呼べば現に聞玉ひ、敬禮すればアナタは親をなはし玉ひ、
意に念すればアナタは知り玉ひ、こなたより憶念し奉れば、アナタは幾倍か
深く憶念しくださるゝごの導師の指導にして誤りなからば、今現に念佛三昧
を修しぬるに、

大ミオヤの慈顔に接することを得られぬことゝかくな思ひ玉ひを。また今現
に大慈悲の懷の裡に在ることをもゆめな疑ひ玉ひを。

此肉體に於いても分曉せられてまだ幾日の間は母の懷に抱かれて居ながら
懐かしき母の容を見ることができぬことにて候。

しからばいかにせば吾母の容を見ることが得るに至らんごなれば啼く聲に
哺ませらるゝ乳を呑む外にはぐくまるゝみちのなきことにて候。

念々彌陀の恩寵に育まれ聲々大悲の靈養を被る。
十萬億土遙かなりご愁ふるご勿れ。法眼開く處に彌陀現前す。

◎月にかかる雲

古人も煩惱の犬は追へごも去らず。菩提の鹿は招げごも来らずご。されご
も、いご敬愛するごころの尊宿よ。煩惱即菩提なれば、肉體が最も愛するご

— (4) —

— (3) —

ころの或對象物に對する情の深ければそれと同じく靈の對象たる宇宙間に二つごなき三つごなき釋迦尊もよの他の十方諸佛もみなひきつけらるゝ
あみだほごけにひけつけられて、頭より爪先きまで、凡て全部を放げ込んで此世より永遠にまで離れぬやうに成りたまはれよ。されども淨滿月のみすがたを瞻まんごすれば、ますく淨雲のためにさへらるゝごを歎くこの事なれども、されども群り來る雲も月の光に映るひて、一しほまた月をかざりの因縁ごもならぬ限りもあらざりしならぬ。兎にも角にも群り來る雲の心は月のそれごは異りて須臾の間こそは月を失はしむるやうなれども、しかしそれは永しへに在るものならざれば、かまへて尊き御名を通して慈悲のみすがたに接するおもひをなす時は、いつかは煩惱も即菩提の月ご成る時は必ず來るごを信じて一に彌陀のお慈悲を仰ぎ玉へよ。

—(5)—

◎人生は修行に出されたのである

佛教に積極方面と消極方面とありて、消極面より見れば現世界現人生はかく人間になご生れ出さればよいものををもく六道に迷ひ出したのが生死の苦を受けねばならぬ運命に陥ち入つたのである、故に是非此の迷から出でざれば眞の永恒の生命に入るごはできぬご。

積極の方より云はゞ、法身の大ミオヤより必然的に修行に出されたので天にも地にも此の五體五根六識にも本より罪はない。大ミオヤの聖旨に隨はさるのが罪である。

無論現人の身心は完全ではない。されども報身の光明を被むりて靈化せらるべき性能を有つてゐる。即ち佛の子として光明生活に入らるべき可能性を有つてゐる。

人類は高等生物の故に宗教の要あり能あり。鑛物でも劣等なる石は琢磨の

—(6)—

要はない。人類已下の動物は宗教を以て脱却すべき要はない。人類は金剛石の如くに琢磨せざればならぬ性を有つてゐる。是非ごも報身の光明を被むりて靈化せねばならぬ。それが即ち法身の大ミオヤより産み出されたる佛性の卵を報身の慈悲ご知恵の光明によりて靈化せらるべき性を有つてゐる。折角に人間ご云ふ學校に選み入らされて十二光の光明に依つて信心開發の生活に入つて大ミオヤの子として此の學校を及第せねばならぬ。

現在の生活は日々二三萬の米が生命を獻げて我等に食ご成つてくれるので此の人間の肉ご血ごなつて大ミオヤの光明生活に入るべき身に成らん爲めに米は犠牲ご成つてゐる。若し日々二三萬の米の生命を己が血肉ご爲して居つて日々餓鬼の精神生活を爲せば食はれたる米まで餓鬼道に墮ちてしまふ我が責任は重い、此重い責任はごも自分の力では擔はれぬ。無限の力ある大ミオヤの光明を仰ぐ外はない。

進めよく大ミオヤの光明を被むりて。働けよ働けよ聖旨のまに。

—(7)—

◎大慈悲のオトーサマ

大ミオヤは我は虚空遍滿の大身を以て永しへに可愛き子たる汝を見つゝある故に汝もまた最も親しみのあるオトーサマ、ナムアミダ佛ご我を呼べよ。

本ごうに我は汝のオトーサマである故、慮なく我をオトーサマご呼べよ。我は汝が久遠却來オヤの許を離れ光り輝きつゝある我前を背ろにして六道輪廻の闇のちまたに彷徨うをいかばかりにか氣づかひに思ひつゝあるごよ。子を思ふ親ご親をおもひなばごは、肉の親子の間許りでなくて誠に汝をおもふミオヤの慈悲なるごを念れよ。尊宿よ、いつもく夜も晝もまた行く時も寐る時もしばし離るゝごなきミオヤを、あなたは眞實にしたはしくおもひなさるか、まごごに懐かしくしたひなさるか。

空海上人の道詠にて

空海が心のうちに咲く花は彌陀より外に知る人はなしご、子より眞實にミ

—(8)—

オヤを知るやうになれば本さうに此我等がこゝろはミオヤより外に知る人はなし。此の程、此の道詠の彌陀より外に知る人はなしといふ意に就いて一人の信仰の告白には、本さうに私共は自分勝手のわるき心朝から晩まで苦みごうし煩惱のために常に常に悩みごうしてある此のこゝろの悩みもだへは何人に語らうとも只世の人はウハへにこそ同情は寄せてくれ、内心はア、又愚痴をこぼす男哉おもうて眞實に我身のなやみを我なやみとし、我閻を矢張り御自身のもだえとして同情的に眞底まで知り玉う御方はたゞ彌陀のミオヤの外にはよもあらず。十方三世の諸佛は智慧の光を以て我らが淺間敷さをこそ照見し玉うならむも全く同情の慈悲を以て知り玉うのは只一人のミオヤばかりと思ふ。實にミオヤならで此閻をもあたゝかに融合して悦びごかはらして下さる御方はなしごおもへばいよゝ慕はしくてさ。

また一人の曰うには子を持つて親の心を知るので、此坊が本さうにかはゆくて靜かに抱きて笑顔を見るご世の中に是ほごまた可愛いものはなきことよ矢張り大ミオヤもナムと云ふていただきつく私を可愛くおもうて下さる御慈悲は此子に對する私のこゝろのやうなものにおはすらむ、さればこそミダせり外にしる人はなし。世の中にたゞい何萬の女が居やうとも私の見るやうに此坊を可愛く見ゆる眼は私の外になからうと思ひます。三世諸佛の中にも彌陀はご此私のごことを可愛くおもうて下さる御方はなからうと思ひます。

また一人の解するのには、人間さうしの義理や人情なご云ふことは禽獸には恐らく解することはできぬごおもふ。感情上の美などいふても彼等には分らぬごおもふ。其の如く私共の人間の子ごもに生れて而も成長して人ご成つたからこそ人間のすべての事も解せらるゝ。若し犬の子に生れて犬であつたならば人間の複雑な精神のことは解せられまい。その如く私共は人間の子であるご共に佛の子である、だから人間の子としての成長したばかりでは人事上の事は解らうが、もつこゝ廣みのある深みのある而して微妙なる靈明なる佛の御精神に經驗し玉ふことはわかりませぬ。恰も犬か人間のこゝろ

が解せぬやうに。そこで佛の子としての心の花は開くに随つて眞實に甚深微妙の眞理がわかり廣い〜大きい〜ミオヤの心の海が眺めらるゝ、だから今此ミオヤに融合した知見せられてある此微妙の心の深みはミオヤより外に知る人はない、ミオヤと共に眺めつゝある常樂我淨の園に眞善微妙の華の咲き匂ふこゝろの色の麗はしき香ばしきさは、みだならで誰か知り玉ふものぞ。

維摩經に如來一音演說法、衆生隨類各得解之、道詠に對する人の感まぢまぢにしてまた味あり。

◎眞のたより

黑白の鼠の爲めに命の藤根を噛まれつゝあるを識らで暮す身の果敢なき我が生れつき、眞に依頼するに足るご認むる此世界も實は永く我を此地上に留め置いて呉れぬ、今に此の地球より振り落されて陰府の中有に彷徨ふべき運命なる此身ごおもへば實にもろき運命を以て此世に出でたる我等にて候。只眞に永遠に頼むべきは絶待永恒の阿彌陀如來を頼み奉りて此世及後生哀愍覆護を仰ぐ外之なく候。

◎見佛と云ふことに二の意義あり

見佛ご云ふことは二の意義あり候、
一には念佛して如來の慈光を被むりて眞に信念が生きたる時は、例へば小兒が生れた計りては親の容さへ見へぬが、乳に哺養せられて、からだが発育するに随つて次第に眼も發達する故に親の容を見ゆるやうになる。實は小兒の全體が発達する故に眼も見ゆる如く、見佛ご云ふも實は心靈の全生命が生まれ出し其の兆候として、心眼の見佛ご云ふのである、換へて云はゞ。活きた信仰になれ、如來の光明に依つて靈に活きよ、活きた兆には佛を見奉らんごの意味にて候。

二には先きに述べし如く精神生活の上に常に守本尊として人格的の如來現前し給ふこの信仰は宗教上の最も宗とする所にて候、各寺の本堂に本尊を安置し奉る所以、また各檀家の佛壇に本尊を安置する所以の如、人々の信仰の頭上に常に如來を安置し、各活ける佛壇を空にせずして、自己の本尊の指導の下に日々の精神生活行為を爲すを最も宗教の宗とする所なりとす。斯の理を以て人格の本尊を確立する所以なりとす。

◎三身即一

超然教即ち天臺に云ふ別教のは、三身各別の報身を本尊とす。別教は實は方便教にて圓教の彌陀は三身即一の報身にて是眞實教にて候。

淨土宗にても了、西二師の如きは三身無碍の報身を以て淨土宗の彌陀とす。また宗祖の撰擇集に名號を本願とするに二義あり。一、勝の義、曰く名號に四智三身十力等一切内證外用攝在す云々。名號すでに三身具す。若し三身相離れて只報身のみならば名體萬德圓滿ならず。法身報身應身の聖名に歸命し奉るは、即ち南無阿彌陀佛のこゝ、甲は義を以て乙は法を以て名體法中已に三身相即す。

圓教の三身即一の報身佛を本尊とす。一體三面の報身如來を表面とし本尊とする事にて候。殊に現在の萬物は法身の御恵み、心靈攝化は報身の御慈悲教法を信知するは應身教祖の御力、斯く三身は如來の方より云はゞ一體にて衆生の方より見れば三身を欠いても私どもが身に靈に教に活ることはでき申さず候。

宗祖の名號萬德に三身具徳をのへませるも、また中興の了、西、兩師の如く淨教の立宗判教の爲めに彌陀の宗義の最勝なるを顯彰せん爲めに書を著し説を立てたる爲めに淨宗の今日あるに至れり。

誌料一部前金五錢、郵税五厘、一ヶ年前金郵税共六拾錢集金郵便料六錢
大正十年六月二十五印刷發行(毎月一回發行)

編輯兼發行人 岩品誠信印刷人 東京京橋區本八丁堀一ノ十五 秋場熊太郎
發行所 東京小石川水道端二丁目四十四番 ミオヤのひかり社 振替東京四九三四八番